

正史を訪れる

三章 縄文・弥生の遺跡の地勢考察

森隆一



記念碑 (Wikipedia「大森貝塚」より)

はじめに

1.6 節 河内湖 で、自分で作る色別標高図を使って河内湖の標高図を作成した。これにウェブで見つけた石山合戦の布陣図(図 1.4)に書かれている城砦をプロットしたものが図 1.5 である。

本章では、縄文遺跡の著名な例である三内丸山遺跡と弥生遺跡の著名な例である吉野ヶ里遺跡の地勢図を作成した。また、埼玉・東京・神奈川と大阪の縄文・弥生遺跡の分布図も作成した。

この他にも、幾つかの図を試験的に作成した。本来ならば、これらの図は各節に配置すべきであるが、ファイルが大きくなることと、各図も区切り値などの変更や Fire Alpaca の新たな機能の習得により修正の可能性があるため、本稿では色別標高図をまとめておくことにした。

3.1. 三内丸山遺跡

Wikipedia「三内丸山遺跡」によれば、その存在は江戸時代から知られていたが、新球場を建設する事前調査として1992年より本格的に発掘調査が始められたということである。その後の発掘で、縄文時代の代表的な遺跡となった。三内丸山遺跡で検索したところ、ヒット数は約1,210,000件と表示された。一方、筆者の高校時代の歴史教科書に写真入りで乗っていた尖石遺跡は約522,000件と4割程である。

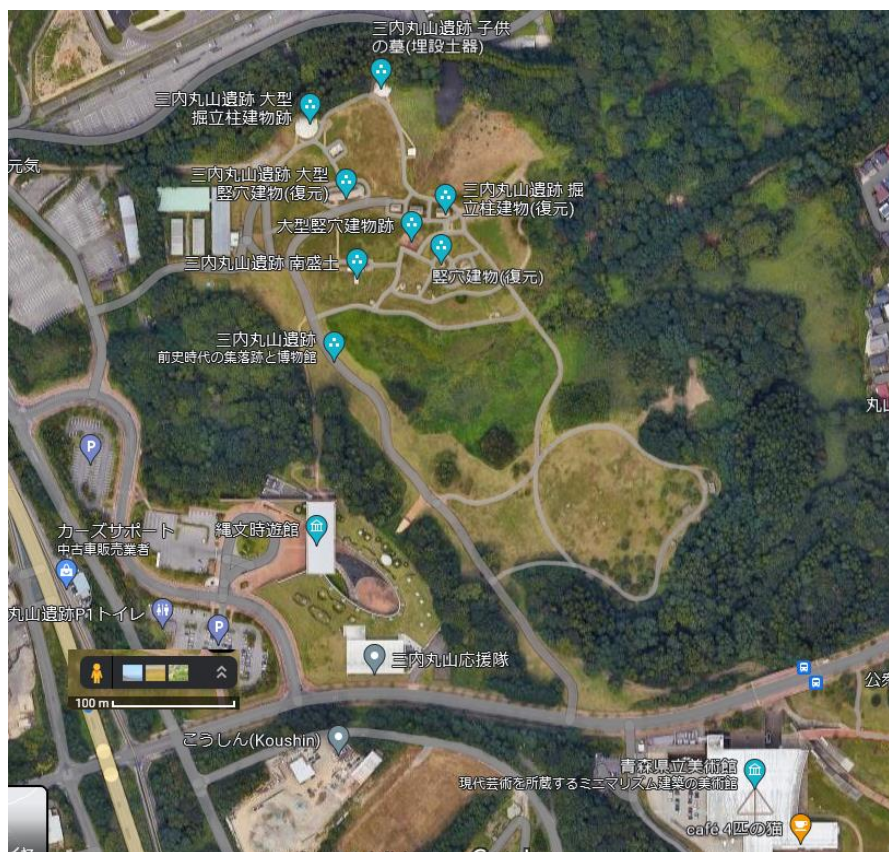


図 3.1. 三内丸山遺跡全景 (Google MAP)

上図は三内丸山遺跡の全景である。

青森駅の西南 4Km 程にある 20m 程の小高い丘に位置している。

次は‘正史を彷徨う’で用いた Flood Maps の図である。

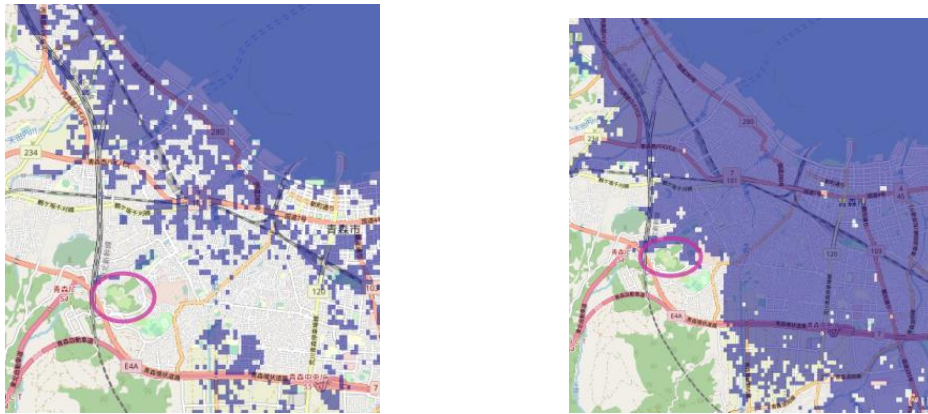


図 3.2. Flood Maps 三内丸山遺跡 +5m(左) +13m(右)

左は縄文海進の最高海水面の+5m, 右は安全を見込んだ+13m の図である。丸の中の緑の部分が生内丸山遺跡でその右に陸上自衛隊青森駐屯地がある。

本章のはじめにで取り挙げた尖石遺跡はハヶ岳の南裾野の標高 1000m 程の所にあり、ここより上には、畑や民家はみあたらなかったのて、現在の農耕生活の限界高度ではないかと思われる。

夏に雪渓が見られるのは、中部山地で標高 3000m 辺りで、北海道では標高 2000m 辺りと思っている。これからは、北海道と中部地方の緯度差は標高では 1000m に相当することになる。

尖石遺跡の標高は 1000m で、三内丸山との標高差は 1000m となり、温度

的には同じ環境となる。

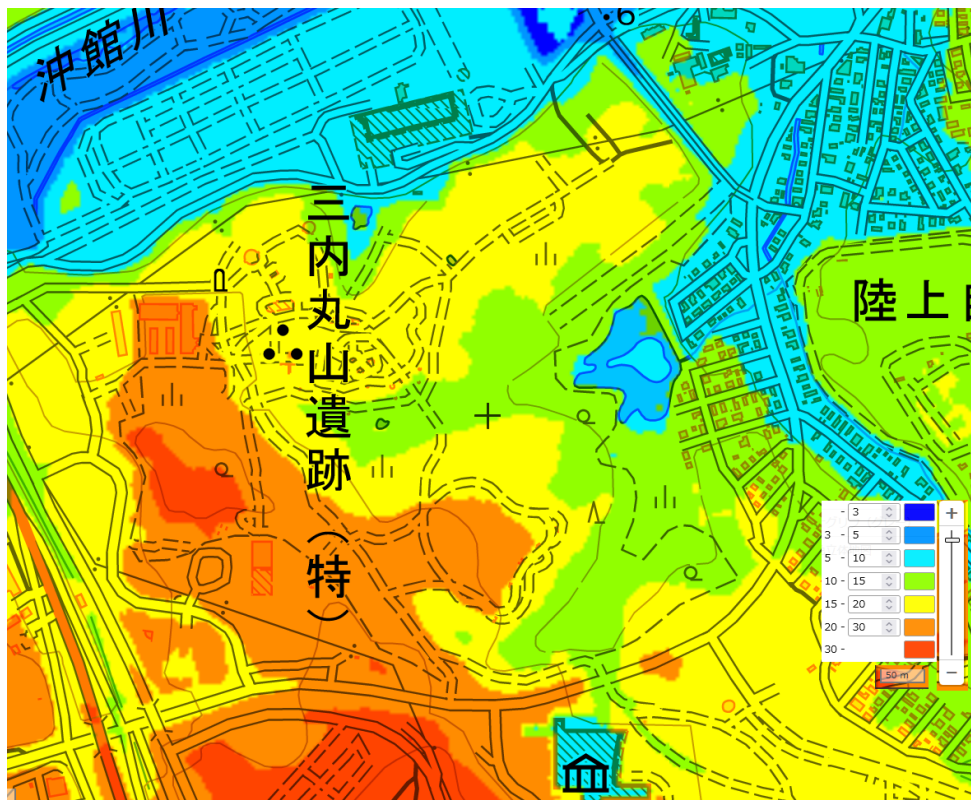


図 3.3. 色別標高図 三内丸山遺跡

上図からは、住居が復元されている地域は黄の部分(15m~20m)に位置している。

表 1.1 の後で、埼玉・東京・神奈川・大阪の縄文遺跡数が 20 以上であることを指摘した。これらからは、縄文人にとっても関東以西の太平洋岸の標高 20m ほうが住み易かったと思われる。

特別史跡「三内丸山遺跡」では、三内丸山遺跡で、平成4年(1992年)から発掘調査が始まったということである。

三内丸山遺跡の特徴としては、集落が発掘されたということと、巨大な建物の遺構が発見されたということであろう。このような遺跡が他に報告されていないとすれば、特殊な例というべきであろう。

ここで、東北の農家では、馬屋を母屋に併設し、冬に室内で作業できるように広い土間が設けられている。

関東以西の太平洋岸では縄文・弥生の複合遺跡も見られる。この場合は、下層にある縄文遺跡の遺構は毀されることになる。

3.2. 吉野ヶ里遺跡

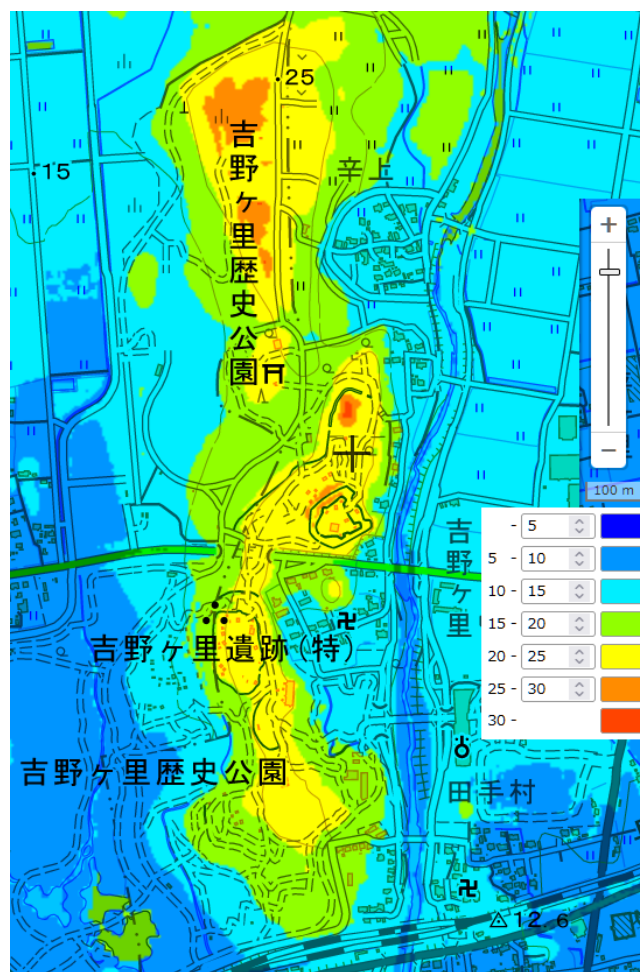
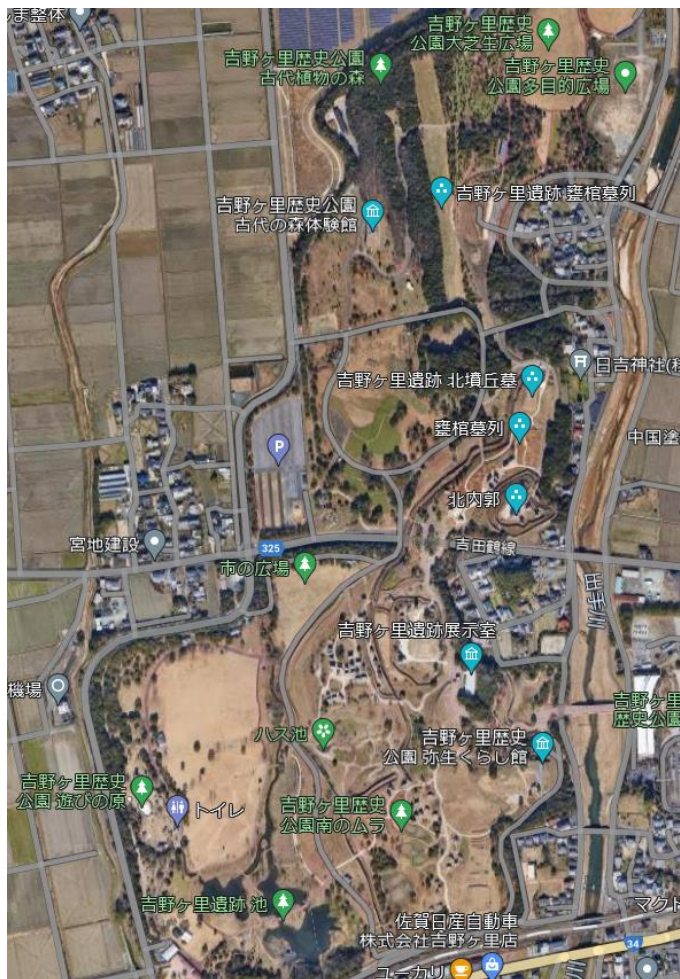


図 3.4. 吉野ヶ里遺跡全景 (Google Map)

図 3.5. 吉野ヶ里遺跡標高図

吉野ヶ里歴史公園「吉野ヶ里遺跡とは」から、遺跡調査の経緯は、戦後、佐賀県が考古学上大きく注目されるようになったのは、現在の公園の東口から約3km北側に位置する三津永田遺跡の調査でした。

昭和 40 年代後半からは、大規模開発の増加に伴い、調査体制も次第に増強され、本格的な発掘調査が実施されるようになりました。

昭和 55 年には、現在公園の倉と市周辺部でも調査が実施されました。

昭和 57 年度に丘陵部、昭和 61 年度に水田部の調査をおこなった結果、埋蔵文化財が包蔵されていると確認された面積は約 58.3ha 判明しました。

ということで、何回かにわたって調査が行われていた。

Wikipedia「吉野ヶ里遺跡」では、

紀元前 4 世紀頃には、吉野ヶ里丘陵の中に集落が形成され始め、これが大規模な集落へと発展することになる。・・・古墳時代の始まりとともに、吉野ヶ里遺跡の濠は大量の土器が捨てられ、埋め尽くされてしまう。集落はほぼ消滅して離散してしまう。

と書かれている。

これと前稿 作業仮説 2.1 から、倭が九州に遷った頃に消滅したことになる。これから倭により滅ぼされたか吸収されたことが考えられる。この可能性があるのかなのかは面白い話題と考えている。

筑後川の対岸に筑後国一宮の高良大社がある。Wikipedia「名神大社」では、従一位が授けられていた。

この辺りから手を付けようと思って、吉野ヶ里遺跡と高良大社を含む地勢図を作成した。

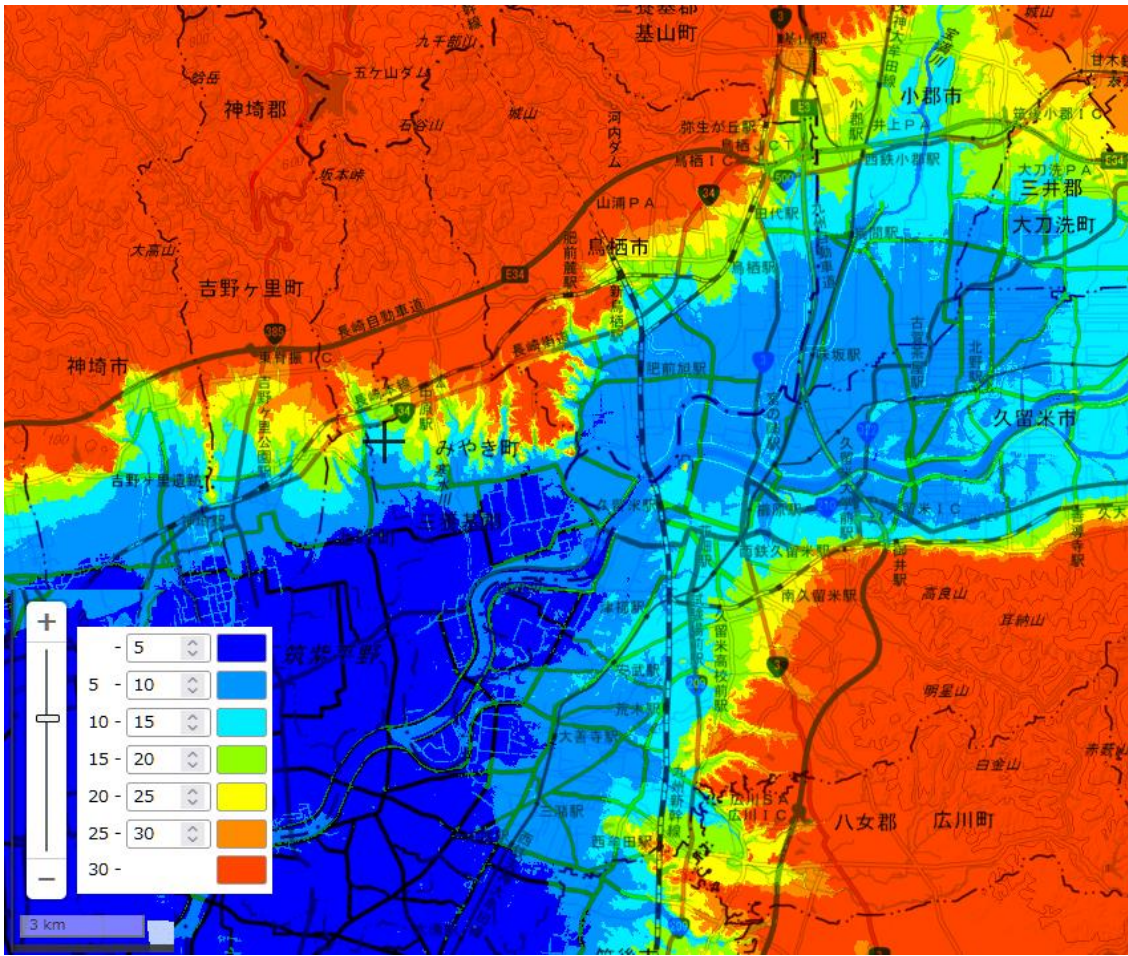


図 3.6. 吉野ヶ里遺跡周辺標高図

3.3. 埼玉・東京・神奈川の縄文・弥生遺跡

埼玉県は縄文・弥生の遺跡数が29、19となっていることは1.1節で指摘しておいた。また、縄文の遺跡数が20を超えるのは埼玉・東京・神奈川・大阪の4都府県であることも指摘しておいた。また、弥生の遺跡須賀2桁なのは埼玉県のみである。

まずは3都県の遺跡を示す。

表 3.1. 埼玉・東京・神奈川の縄文・弥生遺跡

埼玉縄文遺跡 (sj を付けている)

- | | | | |
|--------------------|------------------|------------------|-----------------|
| 1 前窪遺跡(浦和区) | 2 寿能遺跡(大宮区) | 3 南鴻沼遺跡(中央区) | 4 大谷場貝塚(南区) |
| 5 明花遺跡(南区) | 6 広ヶ谷戸・稲荷越遺跡(南区) | | 7 本奈遺跡(桜区) |
| 8 馬場小室山遺跡(緑区) | 9 南中野遺跡(見沼区) | 10 真福寺貝塚(岩槻区) | 11 安行猿貝塚(川口市) |
| 12 新郷貝塚(川口市) | 13 関山貝塚(蓮田市) | 14 黒浜貝塚(蓮田市) | 15 市場坂遺跡(新座市) |
| 16 水子貝塚(富士見市) | 17 上福岡貝塚(ふじみ野市) | 18 花積貝塚(春日部市) | 19 神明貝塚(春日部市) |
| 20 打越遺跡(富士見市) | 21 吹上貝塚(和光市) | 22 宮林遺跡(深谷市) | 23 小岩井渡場遺跡(飯能市) |
| 24 雅楽谷遺跡(蓮田市) | 25 平松台遺跡(小川町) | 26 将監塚古井戸遺跡(本庄市) | 27 橋立岩陰遺跡(秩父市) |
| 28 高麗村石器時代住居跡(日高市) | | 29 地藏院遺跡(宮代町) | |

埼玉の弥生遺跡 (sy を付けている)

- | | | | |
|---------------------|------------------|----------------|------------------|
| 1 円正寺遺跡(さいたま市) | 2 明花向遺跡(さいたま市) | 3 一ツ木遺跡(さいたま市) | 4 大和田本村遺跡(さいたま市) |
| 5 白幡中学校校庭内遺跡(さいたま市) | | 6 井沼方遺跡(さいたま市) | 7 中里前原遺跡(さいたま市) |
| 8 本村遺跡(さいたま市) | 9 鍛冶谷・新田口遺跡(戸田市) | | 10 霞ヶ関遺跡(川越市) |
| 11 鶴ヶ丘遺跡(川越市) | 12 牛王山遺跡(和光市) | 13 吉ヶ谷遺跡(東松山市) | 14 屋敷裏遺跡(羽生市) |
| 15 上敷免遺跡(深谷市) | 16 四十坂遺跡(深谷市) | 17 小敷田遺跡(行田市) | 18 池守・池上遺跡(行田市) |
| 19 神明ヶ谷戸遺跡(美里町) | | | |

東京の縄文遺跡 (tj を付けている)

- | | | | |
|-----------------|----------------|-------------|-------------|
| 1 大森貝塚(大田区・品川区) | 2 代々木八幡遺跡(渋谷区) | 3 井草遺跡(杉並区) | 4 塚山遺跡(杉並区) |
| 5 伊皿子貝塚(港区) | 6 亀塚公園(港区) | 7 本村町貝塚(港区) | 8 三田台公園(港区) |

- 9 お茶の水貝塚(文京区) 10 伊興遺跡(足立区) 11 久ヶ原遺跡(大田区) 12 桜木遺跡(世田谷区)
 13 下野谷遺跡(西東京市) 14 武蔵野公園低湿地遺跡(小金井市) 15 野川中洲北遺跡(小金井市)
 16 中山谷遺跡(小金井市) 17 前原遺跡(小金井市) 18 西之台遺跡(小金井市) 19 はけうえ遺跡(小金井市)
 20 貫井南遺跡(小金井市) 21 貫井遺跡(小金井市) 22 下宅部遺跡(東村山市) 23 桐田遺跡(八王子市)
 24 中田遺跡(八王子市) 25 本町田遺跡(町田市、縄文から弥生時代の複合遺跡) 26 なすな原遺跡(町田市)
 27 多摩ニュータウン No.57 遺跡(多摩市、多摩ニュータウン開発中に発掘された遺跡)

東京弥生遺跡 (ty を付けている)

- 1 弥生二丁目遺跡(文京区) 2 道合遺跡(北区) 3 土器塚遺跡(目黒区) 4 字津木向原遺跡(八王子市)
 5 中田遺跡(八王子市) 6 久ヶ原遺跡(大田区) 7 本町田遺跡(町田市、縄文から弥生時代の複合遺跡)

神奈川の縄文遺跡 (kj を付ける)

- 1 諸磯貝塚(三浦市) 2 勝坂遺跡(相模原市) 3 川尻石器時代遺跡(相模原市)
 4 寸沢嵐石器時代遺跡(相模原市) 5 竊ヶ島台遺跡(三浦市) 6 五領ヶ台貝塚(平塚市)
 7 夏島貝塚(横須賀市) 8 茅山貝塚(横須賀市)
 (以下川崎市) 9 子母口貝塚(高津区) 10 宿河原縄文時代低地遺跡(多摩区)
 11 下原遺跡(多摩区) 12 権現台遺跡(多摩区) 13 長尾台遺跡(多摩区) 14 尾鯉坂遺跡(宮前区)
 (以下横浜市) 15 小仙塚貝塚(鶴見区) 16 菊名貝塚(港北区) 17 師岡貝塚(港北区)
 18 北川貝塚(都筑区) 19 花見山遺跡(都筑区) 20 称名寺貝塚(金沢区) 21 野島貝塚(金沢区)
 22 元町貝塚(中区) 23 山手貝塚(中区) 24 平台貝塚(横浜市中区) 25 岡田遺跡(高座郡寒川町)

神奈川の弥生遺跡 (ky を付けている)

- 1 大塚・歳勝土遺跡(横浜市) 2 三殿台遺跡(横浜市) 3 伊屋之免遺跡(川崎市) 4 緑ヶ丘霊園内遺跡(川崎市)
 5 東高根遺跡(川崎市) 6 神崎遺跡(綾瀬市) 7 中里遺跡(小田原市) 8 矢ノ津坂遺跡(横須賀市)

上を 1 枚の地図に書き込むには高解像度の図を取り込めれば可能であるが、現状では難しい。大阪のように都県別に図示することもかんがえたが、縄文遺跡の込んでいる所に弥生遺跡を書き込むことは難しいと思われることと、縄文・弥生の時代には都府県などは無かったことより、3 地域を併せた縄文と弥生の図を 2 面を作成することにした。以下で、これらの図を掲げるとともに簡単な感想を述べていくことにする。

まずは縄文の遺跡分布である。

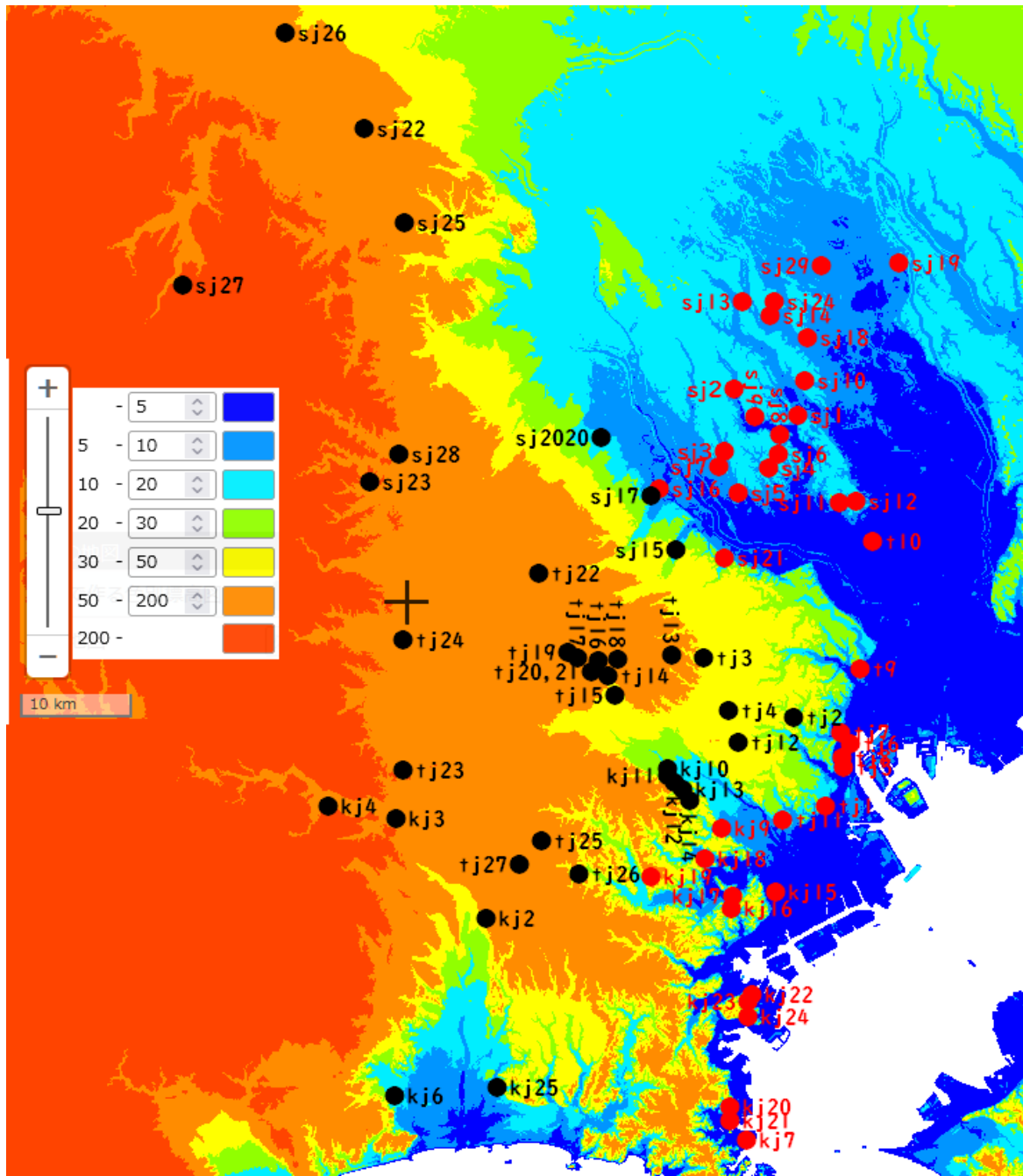


図 3.7. 埼玉・東京・神奈川の縄文遺跡

縄文遺跡は ● または ● で示した。色分けは青い部分に黒字は判読が難しく、補足に近い赤紫に変えた。結果的に、赤紫は低地、黒は高地(20m以上)に分けることになった。また、三浦市の Kji1 諸磯貝塚、kj5 鶺ヶ島台

遺跡と横須賀市の kj8 の 3 遺跡は図の範囲外であった。これらは三浦半島に位置している。

次は弥生の遺跡分布である。

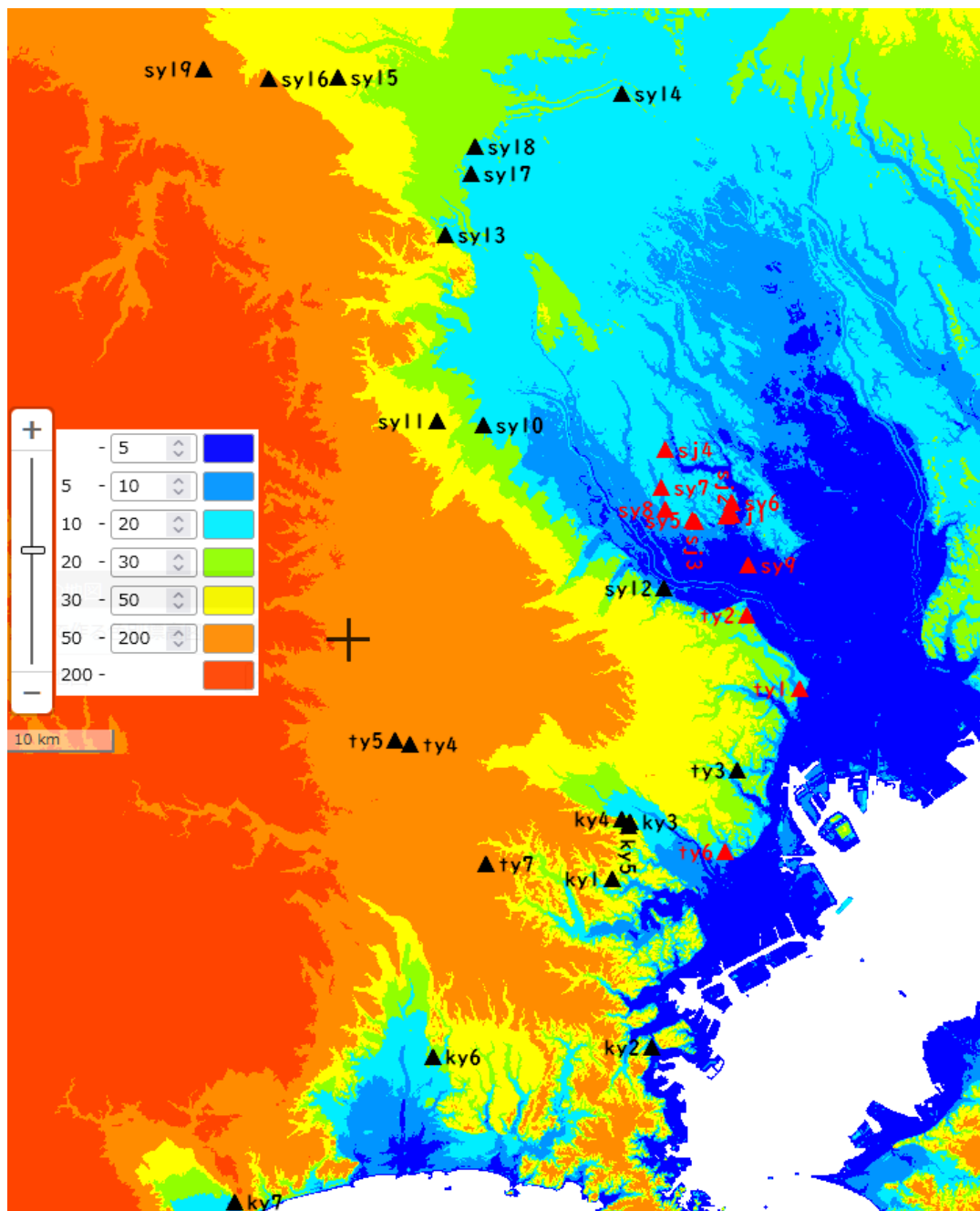


図 3.8. 埼玉・東京・神奈川の弥生遺跡

この図では弥生遺跡は ▲ または ▲ で示した。色分けは縄文と同様に便宜的なもの得ある。また、三浦半島に位置している横須賀市の ky28 矢ノ津坂遺跡は図の範囲外であった。

埼玉県について見ていく。遺跡の所在は、図で青色の中に半島状に突き出ている空色の部分とこの周辺とこれら以外に分けられる。前者はさいたま市から蓮田市・宮代町に至る標高 20m 以下の地域で低地地域といえる。後者は深谷・熊谷などで殆どが標高 20m 以上の地帯で高地地帯ということが出来る。多くは黄色地域に近い所に位置している、

低地では縄文遺跡と弥生遺跡は混在しているが、弥生遺跡はこの地域の南半分にある。一方高地では、縄文はオレンジの部分にあり、弥生は緑の部分に多く、オレンジの部分は少ない。ここでのオレンジは、図でのオレンジとその下のくすんだオレンジの部分を併せたもので、30m 以上の地帯である。

東京と神奈川では、縄文遺跡は武蔵野と思われる地域高地と海岸近くの両地域に分布しているが、弥生遺跡は武蔵野の地域はまばらで、多摩川流域と思われる所に幾つかが見られる。埼玉県のずからは、湾岸の青と緑の境界地帯にもあってもよいと思われる。昔読んだ吉川英治の『徳川家康』からは、徳川の運命を掛けた都市開発(干拓)が行われ、東京となってからはさらに加速したはずである。これにより、遺跡が破壊されたことも考え

られる。

ここで、埼玉県の高地部分に縄文と弥生の遺跡を合わせた図を作成した。

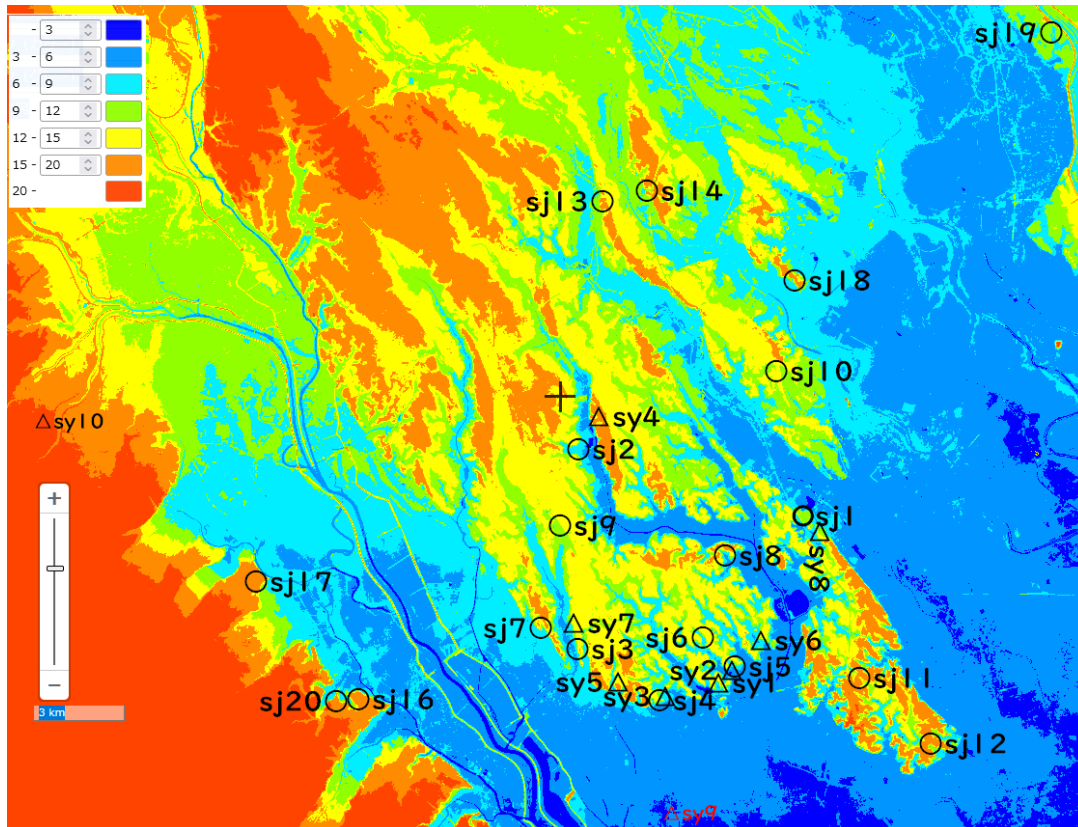


図 3.9. さいたま周辺の縄文・弥生遺跡

図 3.7 と図 3.8 では記号が重なって遺跡の判別ができなかったのが、少しわかり易くなっている。

弥生は常緑広葉樹林、縄文は落葉広葉樹林というイメージが一般的と思われる(少なくとも、筆者が高校生の頃は)。前に京都の北山辺りがこの境界に当たると述べた。

生物多様性センター>「おもな都市の月平均気温・月降水量」に書かれている理科年表昭和 57 年による都市の年平均気温のうち、京都から日本海沿岸を北に見ていくと、

京都 15.2、福井 13.9、金沢 14.0、富山 13.5、新潟 13.1、秋田 11.0、青森 9.6 となる。また、関東を東京から北にみれば、

東京 15.3、熊谷 14.1、前橋 13.8、宇都宮 12.9 となる。さいたま市は別のサイトで、年平均気温：14.8 °C 統計期間：1981～2010 ということである。

ここで、以前引用した縄文海進と弥生の小海退の記事から

「縄文海進」約 6,500 年前-約 6,000 年前にピークを迎え、ピーク時の海面は現在より約 5m 高く、気候は現在より温暖・湿潤で平均気温が 1～2°C 高かった。

「弥生の小海退」弥生の小海退とは 3～2 千年前に現在よりも海水準が 2m ほど低下したとされる現象である。

海退は海進時と同じ割合で温度が下降したとすれば、平均気温差は 1.5～3°C となる。京都を基準とすれば、13.7 から 12.2 となり、富山から秋田の間になる。中間は新発田か坂田か。

ウィーン(ヴィエナ)の古名はヴォンドヴィナといって窪地という意味ということを連想した。Google で「風速 温度」で検索したら、“風速 1m/s で体感温度が 1°C 下がる” と言われているらしい。

次は小金井の縄文遺跡を見てみる・

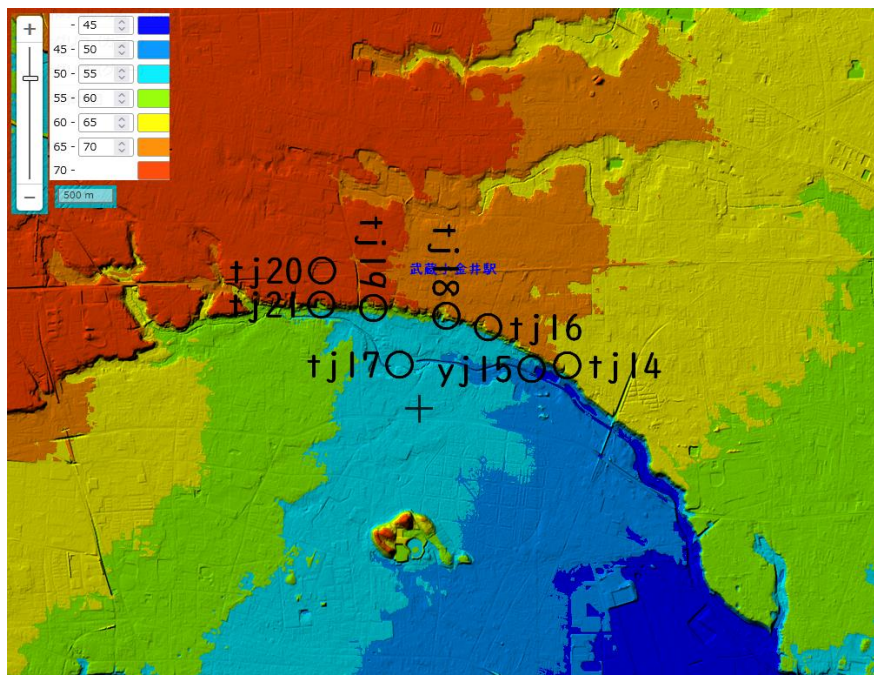


図 3.10. 小金井市の縄文遺跡

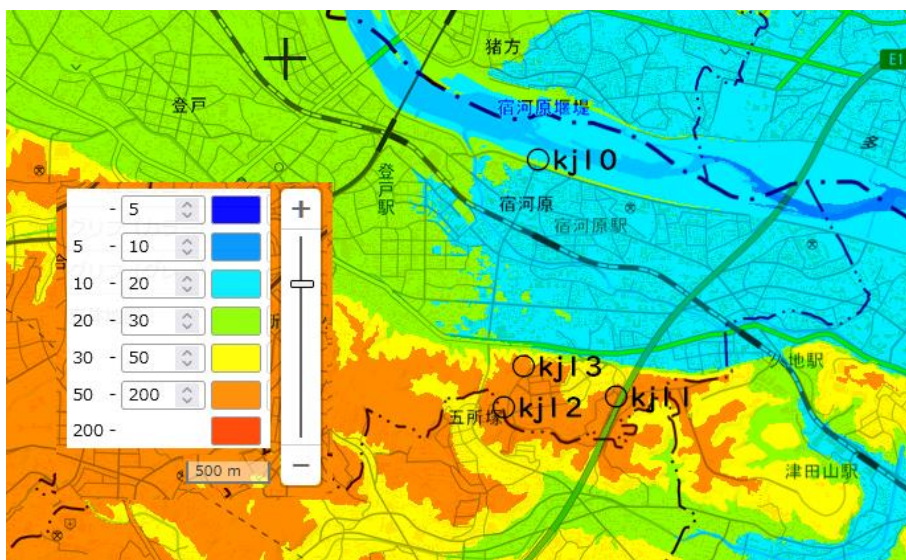


図 3.11. 川崎市多摩区の縄文遺跡

3.4. 大阪の縄文・弥生遺跡

これらの遺跡は Wikipedia 「縄文時代の遺跡一覧」、「弥生時代の遺跡一覧」に記載されているもので、次のものである

表 2.5. 大阪の縄文・弥生遺跡

大阪の縄文遺跡 (j を付けている)

1 池島・長原遺跡(大阪市)	2 森ノ宮遺跡(大阪市)	3 穂積遺跡(豊中市)	
4 福万寺遺跡(東大阪市、八尾市)	5 久宝寺遺跡(八尾市)	6 恩智遺跡(八尾市)	
7 亀井北遺跡(八尾市、大阪市)	8 日下貝塚(東大阪市)	9 馬場川遺跡(東大阪市)	
10 鬼塚遺跡(東大阪市)	11 鬼虎川遺跡(東大阪市)	12 縄手遺跡(東大阪市)	13 宮ノ下遺跡(東大阪市)
14 神並遺跡(東大阪市)	15 向出遺跡(阪南市)	16 更良岡山遺跡(四條畷市)	17 讃良川遺跡(四條畷市)
18 砂遺跡(四條畷市)	19 船橋遺跡(柏原市、藤井寺市)	20 四ッ池遺跡(堺市)	
21 浦橋遺跡(堺市)	22 讃良郡条里遺跡(寝屋川市)	23 仏並遺跡(和泉市)	24 神宮寺遺跡(交野市)
25 穂谷遺跡(枚方市)	26 国府遺跡(藤井寺市)	27 淡輪遺跡(岬町)	

大阪の弥生遺跡 (y を付けている)

1 池上・曾根遺跡(和泉市・泉大津市)	2 東奈良遺跡(茨木市)	3 安満遺跡(高槻市)
4 池島・福万寺遺跡(東大阪市・八尾市) (j3 と同じ)		

縄文遺跡に対して弥生遺跡は 2 割程である。さいたま市に近い状況を予想していたが、東京の湾岸に近いじょうきょうである。これからは、弥生時代は湖沼地帯の干拓は出来なかったのかもしれない。

大阪府に所在する縄文遺跡と弥生遺跡を色別標高図に書き込んでみた。河内湖の中央部分に見える緑色の点状のものは鶴見緑地である。

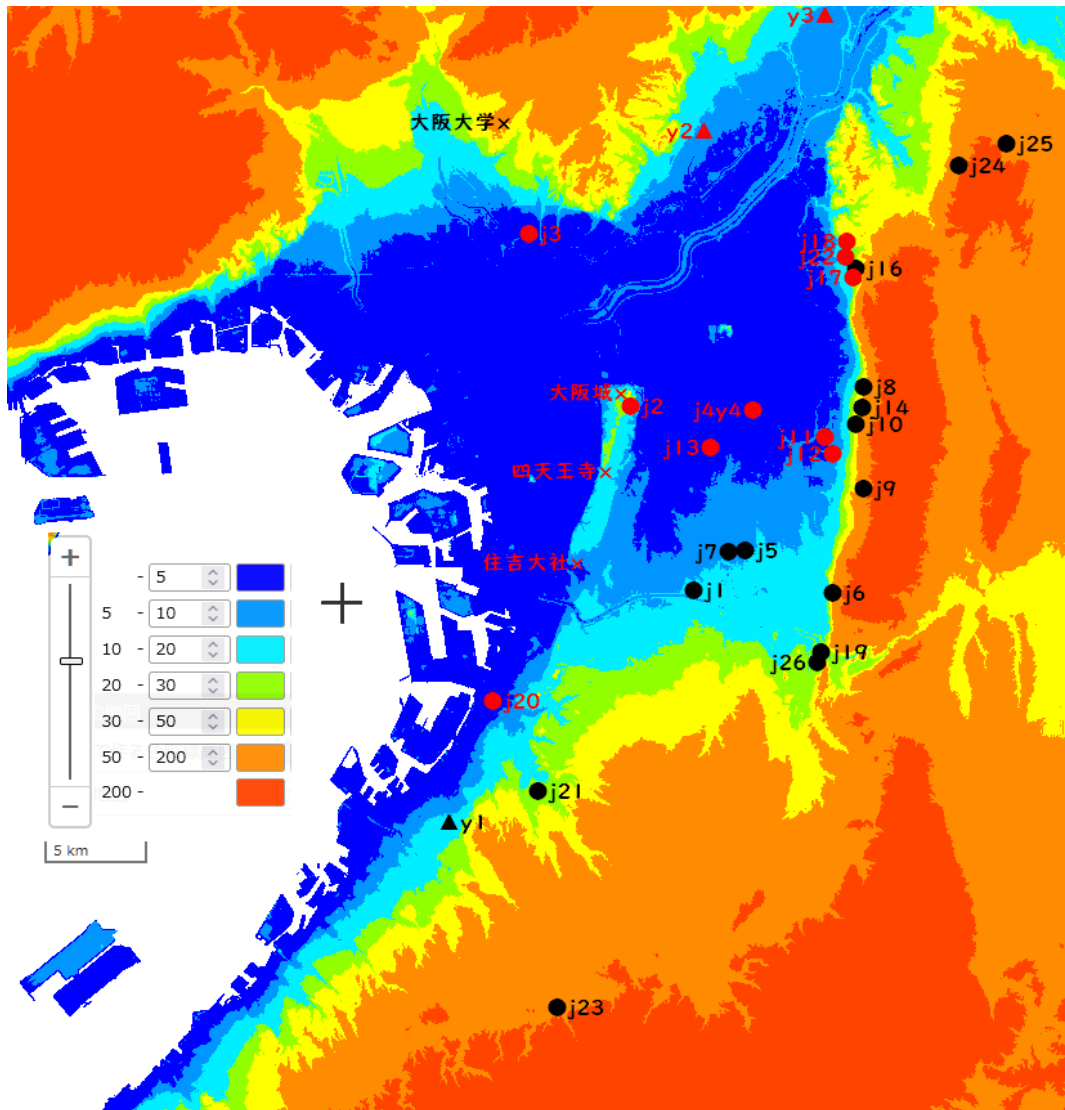


図 2.12. 大阪の縄文・弥生遺跡

この表のうち j27 淡輪遺跡(岬町)は範囲外である。また、大阪大学・大阪城・四天王寺・住吉大社を付け加えた。

図 2.10 に対する感想を挙げる。

まずは、標高が 200m 以上オレンジの地域には遺跡がない。

表 1.1 で述べたように、縄文遺跡数 27 に対して弥生遺跡数は 3 と圧倒的に少ない。j4 福万寺遺跡は縄文・弥生の複合遺跡とあったので、これを加えても 4 である。

縄文遺跡は、生駒山麓で黄色部分を主に 17 ほど見られる。5m 以下の青色部分にも 4 カ所ほどある。

これより、縄文遺跡は比較的万番なく分布しているといえる。

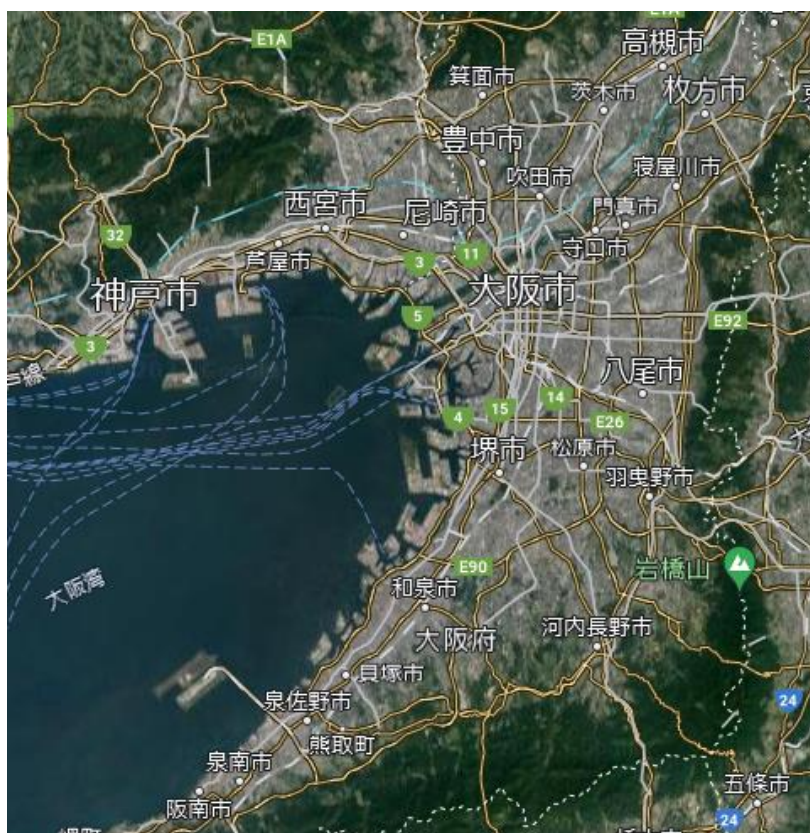


図 3.13. 前図の現在 (Google Map)

1.8. 四大文明メモ

まずは、諸王朝の簡単な年表を作成した。

表 1.5. 四大文明の王朝略年表

	黄河文明	インダス文明	メソポタミア	エジプト
8000~7500			ハッスーナ期	
9000~7000		メヘルガル II 期		
9000~7000	裴李崗文化			
9000~7000	老官台文化・北辛文化・磁山文化			
7600~7000			サーマッラー期	
7500~7300			ハラフ期	
7500~			ウバイド期	
7000~6000	後岡文化			
6800~5500		メヘルガル III 期		
5500			ウルク期	縄文海進ピーク
~BC3100				先王朝時代
5500~4600		メヘルガル IV 期		
6800~4500	仰韶文化			
4600~4450		ハラッパー IIIA 期		
4450~4200		ハラッパー IIIB 期		
BC2686~BC2181				初期王朝時代
4100~4000			ウル第三王朝	
4000~			イシン第一王朝	
4200~3900		ハラッパー IIIC 期		
BC2055~BC1795				中王国
BC1749			バビロン第1王朝が統一	
BC1595			ヒッタイトにより滅亡	
BC1550~BC1069				新王国
3600~3000	殷			
BC671			アッシリアエジプトを征服	
BC626			新バビロニア	
3100~2500		十王戦争・十六大国		
BC664~BC332				末期王国
3000~2250	周			弥生海退
BC332~BC30				プトレマイオス朝
2200~1800	秦・漢			

‘石仏あれこれ B2 仏教の成立’で仏教成立時(2500年前)の地勢を見るため地勢図を探しているうちに、地理院のサイトで‘自分で作る色別標高図’というアプリを見つけた。これとユネスコ世界遺産分布図を並べたものが‘図 B2.5 ネスコ遺産分布と地勢’である。続いて、‘石仏あれこれ B’で取り挙げる中国の仏教遺跡を見るため、‘色別標高図 B2.15 縄文海進と中国’と‘図 B2.16 中国の世界遺産’を作成した。

色別標高図で青緑の広がった地域はそれほど多くは見られない。インドの色別標高図の左端に見られるのは、インダス文明の地域である。これらから、四大文明の色別標高図も作成し、遺跡の分布図も引用した。このときの色分けの値は、5, 10, 15, 20, 30, 130 であった。海進・海退の立場からは、30m 以上は区別する必要はないということから、今回は、5, 10, 15, 20, 25, 30 とした。

四大文明における王朝は、4000 年前辺りまでに成立している。インダス文明は 9000 年前、メソポタミア文明は 8000 年前、エジプト文明は 4700 年前、黄河文明は 3600 年前となっている。エジプト文明では、先王朝時代が 5500 年前、黄河文明では裴李崗文化が 9000 年前に成立している。

今のところ、文化と文明の定義(条件)は見つけていないので、両者の
使い方を見ていく。文化については、世代を重ねた住居群があれば名付
けてもよいように見える。一方、文明は、巨大石造建築群・(オリジナル
な)文字で書かれた記録に基づく古代帝国のようである。この意味で、イ
ンダス文明を呼んでもいいかということを読んだ気がする。とにかく、
こういう基準は緩んでいくもので、マヤやインカも文明と呼ばれてい
る。ギリシャやローマに関しては見ていない。

縄文海進では、6,000年前に+5mに達した海水面は、弥生海退で
3,000~2,000年前では-2mに下がった。気温も縄文海進では+1~2℃と
いうことであるから、弥生海退では-1℃程度が想定できる。

河内湖の水面上昇は縄文海進後の海退の影響ではなく大和川による堆
積によるものとしたが、四大文明の成立には縄文海進後の海退が起因し
ているのでは想われる。

縄文土器の最古のものは12,000年前で世界最古となっているが文明と
呼ばれていないようである。

日本全体の色別標高図が次図である。ここでの縮尺は図 1.9以下とほ
ぼ同じであるが、本稿への取り込みで多少変化している

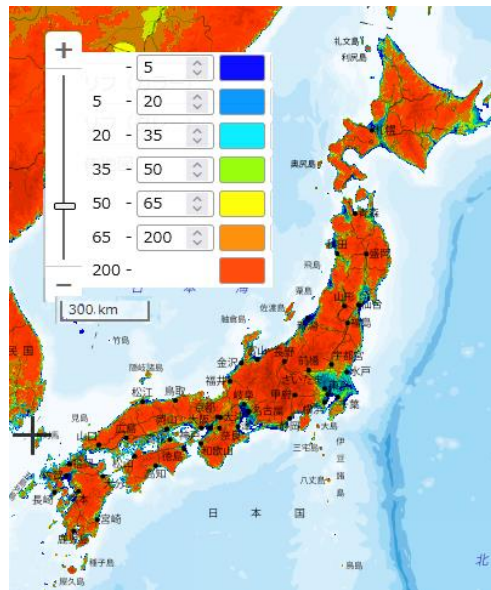


図 3.14 色別標高図 日本

上図から見られる日本の地勢は、青や緑の部分は少なく、殆どがオレンジとなっている。これに似た地勢の地域としては、朝鮮半島、トルコ、ギリシャ、イタリアなどが挙げられる。これらの地域では古代帝国は造られなかった。この地帯では山麓で伏流水が地表に流出する所が多く、住みやすい所と思われる。一方広い耕地はなく、非農業者を多く養うことは難しい。したがって、古代帝国は出来なかったのではないかと考える。

ここで、以下に掲げる色別標高図について注意する。

作成したのは、色別標高図に標準地勢図を重ねたものである。

色別標高図の区切り値は、前に述べたように、5, 10, 15, 20, 25, 30 を用いた。これが

青、くすんだ青、緑、黄緑、黄、くすんだオレンジ、オレンジで塗られている。重なっている地理院標準地図は、

黄緑、黄、薄いベージュ、濃いベージュ、薄い茶、濃い茶、白の色分けが為されている。なお、黄緑と黄の区切りは 200m、黄と薄いベージュの区切りは 500m のようである。

これが重なって、

青、くすんだ緑、緑、黄緑、黄、薄いくすんだオレンジ
(ここまでが 30m 以下)、くすんだオレンジ(おそらく 30~200m)、オレンジ、・・・ となっている。

ここで、くすんだオレンジとオレンジの 1 つ上の所が紛らわしい。

地理院標準地図で表記されるのは、

高縮尺：複数の国、または、大きな国

中縮尺：日本の地方の全図

低縮尺：都府県の全図、都市図

により異なる。

高縮尺では、首都と幾つかの大きな都市のみが書かれている。

中縮尺では、日本・朝鮮半島のみ都道府県(道)と県庁所在市と大きな市が書かれている。

低縮尺があるのは日本のみである。色分けがされていないようであるが、白色ではなく、薄く色づけられているようである。この図では、色に区別は殆ど問題ではない。図 1.6 右が最低縮尺である。

区切り値 5, 10, 15, 20, 25, 30 は縄文海進のピーク時の海水面 + 5m から 5m 刻みに挙げていったものである。

今後の使用に当たっては、目的と縮尺、および、対象とする地域に応じて適切に区切り値を設定する必要があると思われる。このとき、200m は入れた方が良く、さらに高地を扱うときは 500m も入れたほうがよいと考えている。これは地理院地勢図が 200m と 500m で色が変わっていると思われることによる。例としては 5, 20, 35, 50, 65, 200 が挙げられる。

黄河文明

まずは図を掲げる。

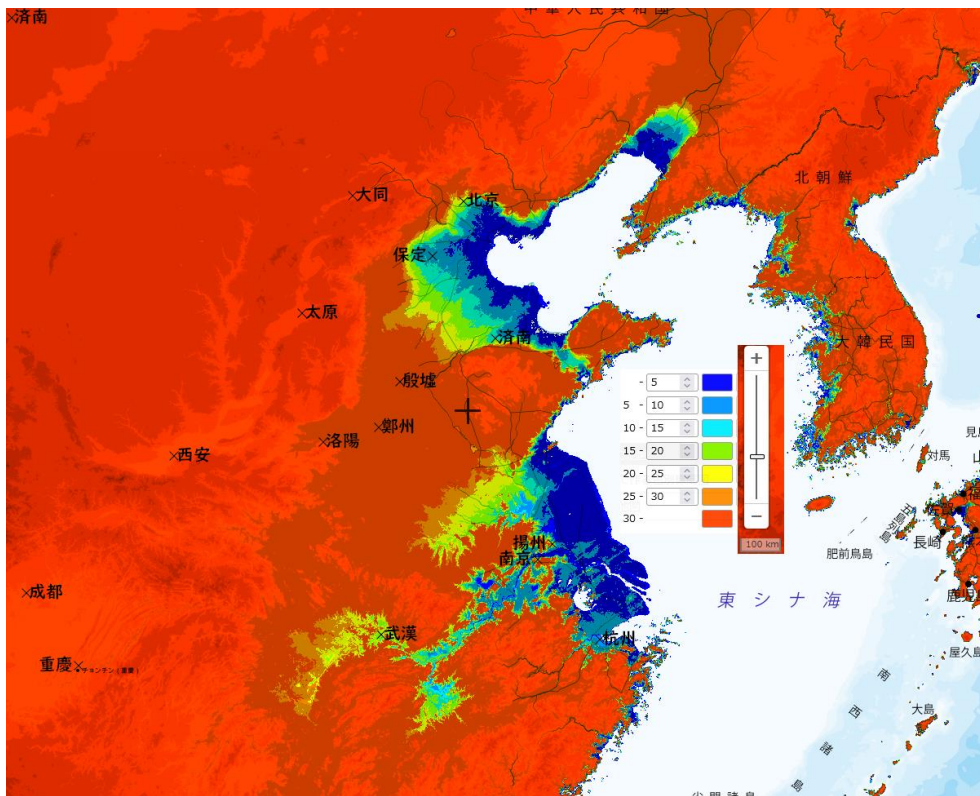


図 3.15 色別標高図 中国

図の殷墟は河南省安陽市に位置している。この他、‘B2 仏教の成立’で取り挙げた諸文化をプロットできればよいが、時間がかかることと色別標高図の利用法も確定していないので、とりあえず、思いつく幾つかの幾つかの地名のおおよその位置をプロットしてみた状況である。仰韶文化の半坡遺跡は西安市東郊外にある。この西安市を含む一帯は中原と呼ばれている。

B2 での諸文化の多くは太行山脈の南部山麓にあると思われる。ここにはないのは山東省滕県・寧陽県の 2 カ所である。

殷墟は 30～200m のくすんだ茶色の地帯にあり、プロットした地点は 40m 程である。東北に黄緑青の地帯となる。これは、中原に居た部族が浸出し古代王朝を形成したとみられるのではないか。

なお、2023 年は台風 4 号、台風 5 号、9 号、11 号が中国に上陸して、被害をもたらした。これらは、黄緑と青の境界付近に多い。上流で降った雨が流れ込んだが、下流部が開拓され、扇状に拡散できず水かさが増したことも考えられる。

インダス文明

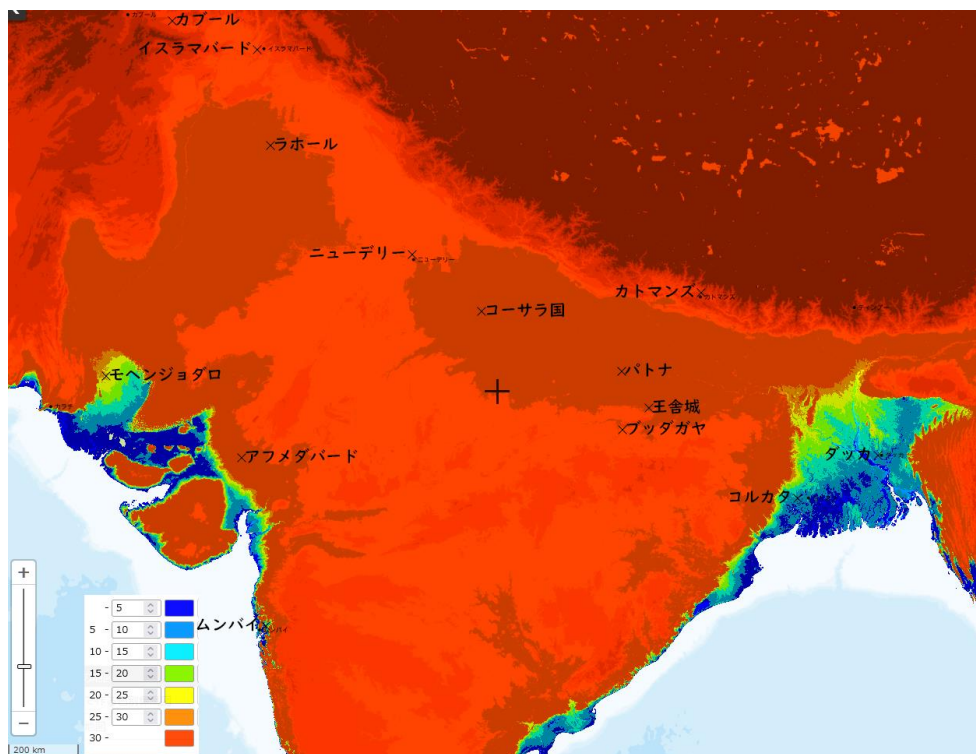


図 3.16. 色別標高図 インド

上図はインダス川とガンジス川の中下流を含むものである。モヘンジョダロはくすんだ茶色の地帯で 50m 程にある。

なお、ニューデリーの標高は 220m 程、コーサラ国は 50m 程、パトナは 60～70m 程である。

エジプト文明

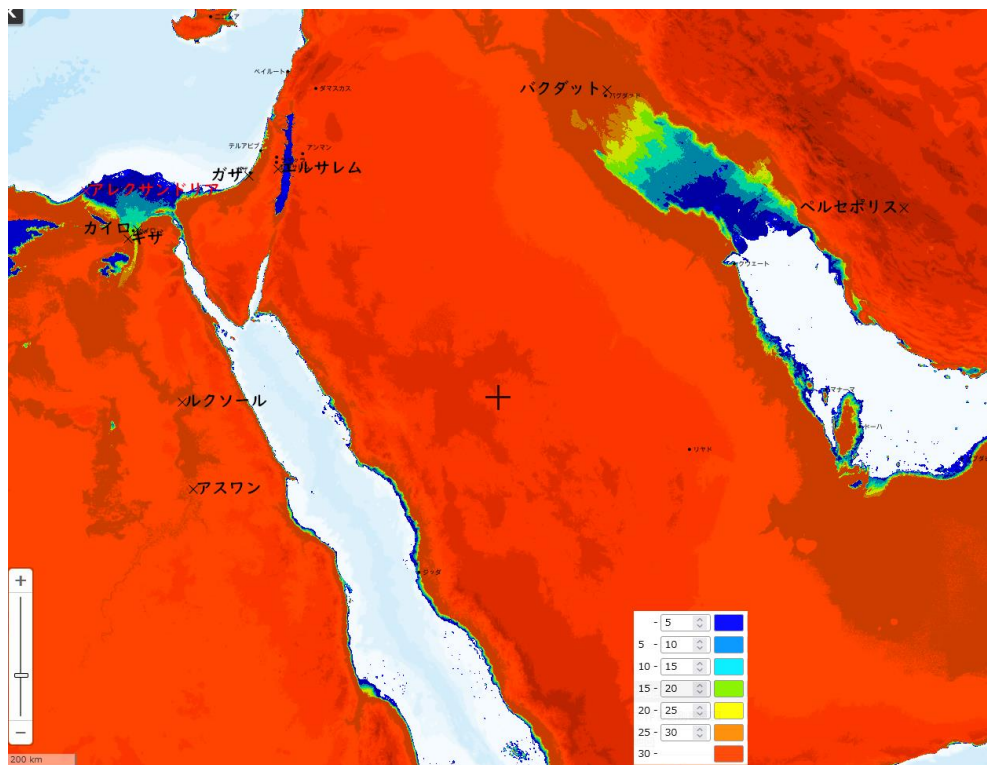


図 3.17. 色別標高図 エジプト・メソポタミア

カイロを要にした典型的な扇状沖積地が形成されている。カイロは 20～30m 程である。カイロ南部対岸のギザは 100m を越えている。ルクソール付近の低い部分は 70～80m、この両側は 400～500m 程である。

メソポタミア文明

ガンジス川流域と似ている。バクダットは 25m 程の標高となっている。

ここでは、色分けが段状になっている。

おわりに

本章は、前号の原稿作成時に見つけた色別標高図の練習結果の披露といえる。

練習として行ったのは、三内丸山古墳と吉野ヶ里遺跡の地勢図、埼玉・東京・神奈川・大阪の縄文・弥生の遺跡分布である。練習図の感想としては、“設定がうまくいけば何かが得られるかもしれない”ということである。この設定の考察はかなりに時間がかかる。

一章で感じた疑問点を以下に列挙することにする。

👉 草創期から晩期まで1万5千年ほどあるが、単一の縄文人であったのか。縄文海進のピークは6000年前であるから、その前1万年程から縄文時代となっている。表1.3ではこの期間は早期となっている。ピークの6000年前は早期に含まれている。縄文時代を3つに分けるとすれば、早期・前中期・後晩期辺りかと思っている。縄文遺跡を区分ごとの一覧表があればいいのだが、見つからなければこの表の作成から始める必要がある。

👉 縄文人(新石器人)はどのように土器製作を得たのか。表 1.5 からは、四大文明は 8000 年前からで、それ以前の土器を調べる必要がある。

👉 縄文時代のイメージである縄目模様の縄文と黄の縄の材料は何か。

Google で「縄 材料」で検索してえたコトバンク「改訂新版 世界大百科事典「縄」の意味・わかりやすい解説」では、

植物の茎や繊維などを撚りあわせて細長くしたもので、紐よりも太く、綱より細いものを漠然と縄と呼ぶ。外国では動物性のものもあるが、日本では古くから稲わらがその材料とされ、農家の夜なべ仕事の大半は、このわら縄を絣う作業であった。伝統的な材料には、このほか麻があるが、特殊なものとしてはスギ、サワラ、シナノキ、ニレ、フジなどの樹皮などが用いられ、麻、シュロ、ヒノキなどで作った縄は丈夫なうえ、水に強いとして、つるべ縄や錨の縄に使用された。クロベ、シラカバ製のものは火縄として重用された。

と書かれている。

👉 縄文・弥生の遺跡からは、それぞれの遺跡の他に、両時代の複合遺跡もかなり見られる。この複合遺跡にはどのような人が住んでいたのか。また、本稿で引用した Wikipedia「縄文時代の遺跡一覧」「弥生時代の遺跡一覧」以外にも多くの遺跡が発掘されている。遺跡の発掘は、市の

教育委員会で行われている。幾つかの市教育委員会では市内の遺跡一覧を Web で公開している。